

文学博士小松茂美君の「平安朝傳來の白氏文集と三蹟の研究」に対する

授賞審査要旨

本書は平安朝に伝来した白氏文集の書跡を多く有する三蹟の研究を先ず行ない、ついで白氏文集の平安朝時代の書跡を博く蒐集して考察し、さらに三蹟の筆蹟考証を行なっている。研究篇と鑑賞篇と資料篇の三冊よりなっている。

研究篇は三編より成つている。第一編は「和様書道の完成と三蹟」について扱っているが、第一に三蹟以前の日本書道として中国より渡来した王羲之書道を博く文献を駆使して精細に扱い、王羲之書法と三蹟の周辺を考察し、さらに三蹟に及ぼした王羲之書法をそれぞれの書蹟の写真によつて一々比較検討し、とくに道風の書風に王羲之の影響の多いことを実証している。次に「三蹟の伝統とその遺墨」として従来の研究の基礎の上に立つて小野道風、藤原佐理、藤原行成の伝記を扱い、それぞれの書跡を考察し、さらに三蹟以外の同時代和様遺品を挙げて解説している。そうして三蹟による和様書道の完成をとき、三蹟の年譜をまとめている。

第二編は平安朝における白氏文集の研究である。白氏文集の渡来とその諸本については花房英樹博士の「白氏文集の批判的研究」その他を参照しつつ考察し、ついで平安朝時代に書写された白氏文集の書跡を涉獵し、見られる限りのものを集めて考察を加えている。第一類調度手本（真跡）を紙本、絹本（絹地切）、綾本（綾地切）にわかつて考察し、第二類調度手本（模写本）を新楽府模写その他にわけて考察し、さらに第三類古鈔本としてその諸本を広く集めて考察している。第三編は白氏文集を主とした三蹟筆跡の考証である。推定の方法として道風については道風の確

実な真蹟として智証大師諡号勅書、屏風土代の二を挙げこれをAとし、その筆跡の特色を(一)筆線および点の形態、(二)文字の形態、(三)筆線の傾斜角度、(四)筆順、(五)配字にわけて検討し、それにもとづき、ほぼ信すべきB群の常楽里閑居詩、三体白詩巻、玉泉帖を検討し、ついで道風と伝えられるC群に属する書跡を検討している。行成では真蹟として確認されている寛仁本白詩巻によりその特色を把握した上でその他の書跡を考証している。一々写真を挙げて具体的に扱っている。その他、絹地切(絹本)、綾地切白氏文集の復元を試み、その筆者として小野道風であることを考証し、またその大半が白氏文集の巻第三、四でいわゆる新楽府に該当することを明らかにしている。さらに調度手本の装飾性についても説いている。

第二冊鑑賞篇は資料となる筆跡の写真を博く集めて挙げてあり、第三冊資料篇は白氏文集の伝わるものの中、巻三、四の新楽府が最も多いことを確認し、この二巻について藤原茂明筆新楽府(神田喜一郎氏蔵)を底本とし、伏見天皇臨摸本新楽府残巻をはじめ二十数本を以て校合を行なっている。

研究篇は本書の中心をなすものであり、その中、王羲之や三蹟の研究も詳密であるが、就中、白氏文集の書跡を広く集めて整理した努力と白氏文集を主とした三蹟筆跡の考証やその成果は小松君の多年にわたる書道史研究の造詣をよく表わして創見が多い。新楽府二巻の校合も精密であり、本文研究の上に資するところが多い。日本に伝来する平安朝時代の白氏文集の書跡が白氏文集の成立した唐代の本文や宋以後の刊本とどう関係にあるかという点には余りふれず、白氏文集の文学としての研究をなすに至っていないが、全体として先人の所論を網羅し、さらに書誌学的見地から白氏文集のわが国に伝存する写本、殊に平安朝能書家の筆に成つたものに検討を加え、かつ三蹟を中心とす

る和様書道の伝統を明らかにし、この方面の研究を集大成して居り、平安朝伝来の白氏文集の基礎的研究として劃期的な業績である。